



歴史資料ネットワークへの協力・支援（自治体・NGO との協力による歴史資料保全事業）

森田, 竜雄

木村, 修二

松下, 正和

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 4(平成17年度事業報告書):99-103

(Issue Date)

2006-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002234>



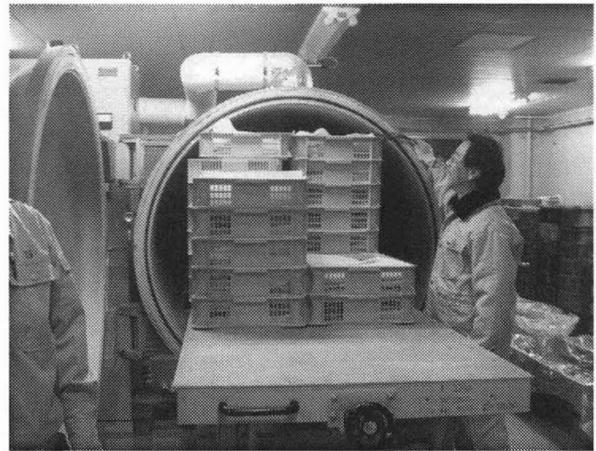
歴史資料ネットワークへの協力・支援

台風23号被災水損史料の修復への協力

昨年度に引き続き、2004年10月に発生した台風23号の水損史料の修復乾燥作業への協力を行った。レスキューした水損史料のうち、①日高町（現豊岡市日高町）T家から救出した近世・近現代の文書約300点以上の中で水損・汚損の著しいもの②出石町（現豊岡市出石町）H地区から救出した近世・近現代の文書・絵図・写真（アルバム）・ファイル等段ボール箱11箱分については、冷凍凍結して真空凍結乾燥処理に回すことになり、昨年度中に準備作業（水洗い・吸水・消毒・整形・袋詰め等）の上、冷蔵会社（西宮冷蔵）で冷凍保管する処置をすませた。昨年度報告書の時点では、これらの史料の乾燥処理を行う機関として、滋賀県立安土城考古博物館・兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所・神戸市埋蔵文化財センターの3機関が決定された段階であったが、その後、実際に処理作業が進められた。以下、その詳細を述べる。2005年3月24日、冷蔵会社より冷凍史料を搬出。安土城考古博での処理依頼分（段ボール37箱、①・②）については、クール宅急便で発送し、兵庫県教委・神戸市埋文センターでの処理依頼分（両者で同5箱分、すべて②）については、県教委の担当の方へ直接お渡しした。そして、安土城考古博での処理依頼分については、翌25日に、史料ネット・センターから要員を派遣して、同館及び県教委・出石町教委（当時）の担当の方々とともに、搬入された冷凍史料からビニールをはがして史料台帳と照合し、史料ラベルを作成・添付の上コンテナへ収納する等の作業を行い、真空乾燥機に収めた。県教委・市埋文センター分については、両機関にすべての処置をお願いした。

そして、各施設での乾燥処理終了後、安土城考古博での処理依頼分については、6月2日、搬入時同様のメンバーで、乾燥済み史料を重量計測し、薄葉紙に包んで発見地点ごとにビニール袋に入

れ、搬送用段ボール箱に詰める等の搬出作業を行い、クール宅急便にて発送、6月6日に神戸大学文学部に搬入した。なお、当日日中陰干しを行った。また、県教委・市埋文センターでの処理依頼分については、9月1日に県教委埋蔵文化財調査事務所魚住分館で引き取りを済ませ、以上で真空凍結乾燥処理自体はすべて終了することとなった。ご協力いただいた滋賀県立安土城考古博物館・兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所・神戸市埋蔵文化財センターの皆様にご心よりお礼申し上げます。



乾燥作業終了後の作業として、固着文書の展開、付着した泥などの清掃、目録の作成（仮目録との対照）などがあり、ボランティアの協力を得ながら、現在も作業を進行中である。今後は、史料の返却日程・方法を検討・協議し、地元で史料をいかに戻していくかが大きな課題である。

（文責・森田竜雄）

兵庫県豊岡市日高町・T家文書調査について

昨年度歴史資料ネットワークが行なった平成16年台風23号水害関連の調査のうち、兵庫県豊岡市日高町A地区在住・T家所蔵文書の調査を3回にわたって調査した。この調査が実現したのは、第1回目調査の直前の4月22日に、史料ネットの会員

からネット事務局へ、同家の所蔵文書についての情報が寄せられたことがきっかけである。内容は同家に水害に被災した史料があるということだった。事務局では早速T家と連絡をとり状況を確認し、被災した書籍、ふすまがあるとの情報を得ている。その後、同家より連絡が入り急遽5月に現地調査が可能となり、2005年5月4日に1回目の予備調査ということで同家を訪問した。つぶさに調査してみると、同家は母屋や土蔵の一階部分は水に完全に浸かったものの、蔵の2階はぎりぎり被災を免れ、そこに長持3棹、書棚2台、その他多数の文献史料を確認した。点数はざっとみて1万点は下らないだろうと判断された。いずれも水には浸かっていなかったもので、水損から免れたことは不幸中の幸いであった。長持ちに入っているもののうち1棹には、一紙文書が文字通りぎっしり満載されており、他の史料と併せれば膨大な数に上ると見込まれた。その日は、現状の確認で同家を辞したが、続いて6月14日にも再び同家を訪問した。この時は、豊岡市日高町の但馬国府・国分寺館館長加賀見省一氏にも同行していただき、前回同様土蔵2階の文書の状況を実見した。T家では年末に被災した土蔵を解体する予定であると聞いていたが、史料を研究に役立ててもらいたいので売り飛ばすなどの処分はせず、何らかの公的機関に寄贈したいのご意志を表明された。その際できるだけ現地で保存してもらおうのが望ましいとのご意向だったので、加賀見氏に同家文書の保管を日高支所（市教委）として考慮願えないかと要請した。この日は結論が出なかったが、結局この点は受け入れられることになった。

とにかく年内に土蔵の解体ということだったので、できるかぎり早急に、同家の文書を土蔵より搬出する必要があったが、その作業が実現したのは、8月2日のことだった。3回目の訪問となるこの日の調査では、史料ネットから8名と日高側から3名の参加を得て、史料ネットによる緊急レスキューの形で作業が進められることになった。搬出作業は、いわゆる現状記録方式の調査スタイルが目指されたが、作業が可能なのは諸般の事情から事実上この日限りであったため、詳細な記録をとっていくことができなかつた。それでも便宜上設定された文書ブロックがどの長持ち・箱のどの位置に収納されていたのかのおおまかな記録だけは最低限とり、デジカメによる原状撮影も同時に

行なった。記録をとったあと、文書群は用意されたダンボールに移し替えて蔵より搬出した。ダンボールの数は約70箱にのぼった。ダンボールは一時的に日高町内の日高文化財収蔵庫へ搬入されたが、湿度が著しく高いなど、ここへ長期にわたって保管することは文書にとってよくないので、いずれ近いうちに別の場所に移すなどの対応を要請した。なおこのときは、まだ寄贈手続きなどはしておらず、歴史資料ネットワークと加賀見氏連署による文書預り証を同家に手渡している。

その後、同年9月9日に但馬国府・国分寺館を訪問し、同家文書の寄贈手続きに向けての話し合いを行なった。またこの時、同月末に文書を燻蒸することも伺い、同館の配慮に感謝した。燻蒸は無事なされ、2006年3月現在同館の収蔵庫に保管していただいているとのことである。

なお寄贈手続きについては、豊岡市教委の意向で、全点仮目録完成後でないとし手続きが行なえないとのことで、こんにちまで遅延している。しかしながらとにかく文書群がダンボールにして70箱にも及ぶ膨大なものなので当分整理の完了が見込めないことや、ひとまず文書群一括として仮にでも寄贈手続きを取り計らっていただき、T家のご意志に市としてお答えいただき、同家の方々にご安心いただけるようご配慮いただきたいと考える次第である。もとより豊岡市も先達での大合併より日も浅く、現場の職員は皆さん大変な状況下にあることは重々承知しているつもりだが、できるかぎり柔軟な対応を期待するものである。

(文責・木村修二)

全史料協研修会（福井大会）

- ・日時：2005年11月9日（水）13:00～15:00
- ・場所：福井県国際交流会館
- ・主催：全国歴史資料保存利用機関連絡協議会
- ・研修会F「資料保存のネットワーク」＜発展コース・意見交換会＞

松下正和（神戸大学文学部）「被災地の自治体と住民との連携による被災歴史資料保全活動」
白井哲哉氏（埼玉県立文書館）「100年の射程から今後を考える」

松下報告では、「歴史資料ネットワーク」の発

足経緯と活動概要を説明し、とりわけ①但馬と丹後地域における2004年の台風23号被災歴史資料保全活動に関する成果と課題、②被災資料保全活動をめぐる現状と課題について災害時の救出活動と平時の防災対策、を中心に検討した。

白井報告では近現代の資料保存の取組を、①1940年代までの郷土教育と密接する資料保存、②1950～60年代の社会運動としての資料保存、③1970～80年代の行政主体の資料保存運動、④1990年代以降の新たな「下から」の動き、と時期区分した。また、地域社会、自治体や公的機関、市民活動、担い手養成の四つの立場からそれぞれの時期の特徴を検討した。



質疑では、愛媛・岡山・福井での水害対応について、鳥取・和歌山での民間所蔵資料の把握についてそれぞれフロアから報告があった。また、行政の職員が災害対応しやすくするために被災地からの派遣依頼の必要性も提起された。最後に、行政が出来ることと出来ないことボランティア団体（史料ネット）が出来ることと出来ないことをより明確にすべきだとの意見もでた。

災害時の未指定文化財保全が後回しにならざるをえない行政と、災害対応が可能な人材と保管スペースが不足する大学と、被災の渦中にある市民の三者は、それぞれ固有の困難を抱えている。しかし、お互いのもつ強みを出し合いながら三者が連携し、ネットワークを日常から作ることで、災害時における被災資料への保全対応の基礎が作られるのではないかと提起し研修会を終えた。

(文責・松下正和)

地域史卒論報告会

・日時 2006年3月5日（日）午後1時～5時

・場所 神戸市立六甲道勤労市民センターE会議室

・報告

安藤美保さん（神戸大学文学部学生）

「兵庫津・御馳走場の空間構造―宝暦度の朝鮮通信使来朝史料を中心として―」

内田美咲さん（神戸大学文学部学生）

「伊丹酒造家小西家の経営構造―酒造業・大名貸・江戸下り酒問屋を軸に―」

森本泰弘さん（神戸大学文学部学生）

「都市青年会と町運営の変容過程―姫路市を事例として―」

・主催：神戸史学会・歴史資料ネットワーク

・後援：神戸大学文学部地域連携センター

この卒論報告会は、おもに兵庫県域の地域史をテーマにした大学生による卒論報告会である。神戸史学会は、阪神淡路大震災で被災した歴史遺産の保全のために結成された歴史資料ネットワークの構成団体のひとつであり、震災時の体験を踏まえて地域遺産や史料を大事にする社会の構築を進めている。この実現には、市民社会に、趣旨に賛同して支援してくれる人々の存在が必要であり、歴史系の大学で勉強し社会に出た学生は、その大事な卵であるというコンセプトのもとに企画された。

大学院に進学しない大学生の場合、四年間の研究成果を社会に発表する場はほとんどない。また公表されなければ、市民社会における成果の蓄積は進まない。大学生と市民をつなぎ、大学で学んだことを市民に聞いてもらう場として企画されたこの卒論報告会は、研究発表会などという堅苦しいものではなく、気楽に成果を語ってもらい、市民の感想を聞いたり情報交換の場を目指している。

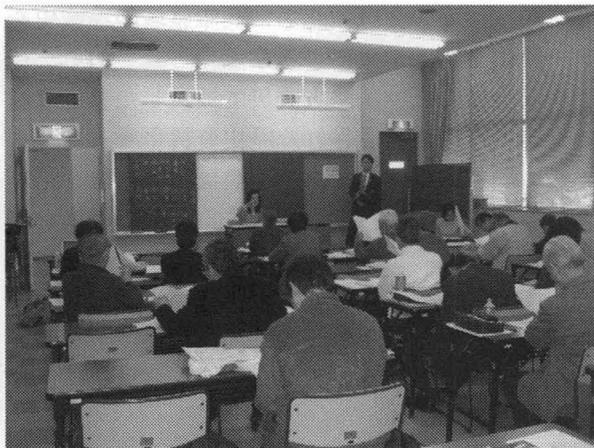
第1回目の今回は、兵庫県を対象とした近世から近代までの地域史をテーマとする卒論が報告された。

当日は、20人を超える市民の方が報告会に参加し、学生の報告に対して熱心に質問を行った。中には鋭い質問も飛び出し、学生がたじたとすることもあったが、自らの研究と地域社会との接点について考える機会を得たことで各自「いい経験になった」という。

企業への就職が決まっている安藤さんからは

「時間をオーバーするほどの質問の多さに圧倒されました。市民の方々は大学生の成長に大変興味をもたれているようです。卒業論文を報告できる数少ない機会なので、今後も継続していただきたいと思います」、内田さんからは「一般の方の前での研究成果発表ということで、学内での報告会とはまた違った刺激を得ることができました。一般の方の興味の有り所を知ることができたので、地域史を研究していくうえで今回の経験を生かしていきたいと思います」という感想が得られた。

一方で「大学での勉強の成果を直に知るとても良い機会。今後もぜひ続けてほしい」という市民の声も多く聞かれ、成功裡に終わったと言えよう。



報告会の内容については、「歴史と神戸」の誌上で、何らかの形で発表することになっている。大学院に進学する学生はもちろん、進学しない学生にも内容を活字化する機会をもうけ、卒業後にも活動や調査を続ける動機付けになれば一層望ましいだろう。また、今回は報告者が神戸大学だけに偏り、他大学からの報告者がいなかったのが残念であったが、大学で学んだことを市民の皆さんに聞いてもらう場を設定することで、大学と市民社会をつなぐ会になるよう、今後とも当センターはこの企画に協力していく予定である。

(文責・松下正和)